

不器用令嬢の百合は難しすぎる！

【第2話】

みなぎし　すい

【人物一覧表】

澤良宣明那（12）（現在）：社長令嬢

沢良宜大河：企業の社長

沢良宜凜花（37）：警官

山田岬（30）（現在）：沢良宜家の

使用人

青宮院綾：金持ち令嬢

大道永遠（17）：明那の幼馴染

田中寛子：学生

3の3担任（40）：教師

女子生徒A

○学校・3の3教室

沢良宜 明那 「え、えっとどういうことかしら？」

明那、体を動かして顔を赤くし、あたふたする。

綾、顔をしかめる。

田中 寛子（17）「あ！ そ、その。あああなたと友達になりたくて！」

明那「あ、わたしと？」

青宮院綾（17）「ちょっと、勝手に間に入らないでくださいかしら？」 沢良宜さんはわたくしのライバルなのに」

寛子「わたしのほうが沢良宜さんの横にふさわしいわ」

綾「横程度で満足なさつてるの？」 沢良宜さんは認められたいなら横でなく上を目指しながらい！ ライバルを名乗れないで沢良宜さんの横なんておこがましいですわ！」

寛子「わたしの学力なら沢良宜さんのパート

つ、友達にふさわしい！」

2人の視線がバチバチする。

明那「ふ、2人とも、落ち着いて」

明那、なだめる。

2人、落ち着く。

○沢良宜宅・明那の部屋（夕方）

明那と岬、2人きりで話をしている。

明那「——ってことがあって」

岬「そうなのですね。お嬢様はどちらがよろしいのですか？」

明那「ええっ、そそそれはちょっと！」

田さん、何言つてるの！」

岬「ふふ、すみません。そうすれば、百合ができるではないですか」

岬、にこっと笑う。

岬「青宮院様はまだお帰りになつていないのでですか？」

明那「父親に会つてからくるつて。それより、

明日転校生がくるつて」

岬 「まあ。女の子だったらしいですね」

明那 「もう！ 山田さんったら！」

岬 「かわいいですよ、お嬢様」

明那 「！」

※ ※ ※

(フ ラ ツ シ ュ)

岬に風呂でえっちなご奉仕される明那。

※ ※ ※

明那、赤くなつた顔を隠す。

明那 「うつ！ こ、こんな妄想破廉恥よ！」

岬 「声が漏れています、お嬢様」

明那 「ひやうつ！」

岬 「私は嫌ではございませんので、お気にな

さらず」

明那、縮こまる。

N 「明那は、えっちなことに興味があるわりに恥ずかしがりなのであつた」

明那 「ううつ」

明那、まだ顔が赤い。

インター ホンが鳴る。

○ 同・玄関（夕方）

綾、靴を脱ぐ。

綾 M 「よかつた。沢良宜さん、明るいですわ。

もし暗かつたらと思うと」

沢 良宜 澄花（37）「あら、あなたが青宮院さん？」

凛花、顔を出す。綾のもとに歩く。

綾 「はい。わたくしの勉強のために居候させ

て頂き、ありがとうございます」

凛花 「青宮院さん、明那と仲良くしてあげて
ちようだいね。あの子、昔は違う家にいて
大変で、幼馴染とはなればなれになってる
の。幼馴染の子が差別を受けてたらしくて」

綾 「そう、だつたんですね」

綾、少し悲しそうな表情をする。

綾 M 「その話……」

綾、凛花に軽くお辞儀をして明那の部

屋へ向かう。

○ 同・明那の部屋（夕方）

綾が部屋に入つてくる。

明那「おかえりなさい」

綾「沢良宜さん！ 今日の宿題、どつちが早く終わるか勝負ですわ！ 勝つたら、そこの棚のものを読ませてもらいますわ！」

明那「ええっ… そそそれはちよつと」

明那、焦る。

綾「また恥ずかしいの見られたくなかったら、わたくしに勝つことですわ！ 本気の沢良宜さんを越えてこそ意味があるのですわ！」

明那「ちよ」

岬「では、私が審判になりましようか。それでは、スタートです」

明那「ちよ山田さんうつ！」

明那、岬の服を掴む。

岬M「尊いです、親愛なるお嬢様。わたしとしましたことが、お嬢様の百合見たさに青宮院様の希望を聞いてしまいました」

岬、ほほえみながら2人を見守つてゐる。

○沢良宣宅・明那の部屋（夕方）

綾、百合漫画を読んでいる。

明那、赤くなつた顔を両手で覆いながらベッドで足をバタバタさせている。

明那「なんてこと、わたしが負けるだなんて！」

綾「まあ、こんなもの読んで怒られませんの？」

明那、足の動きを止める。

明那「ここはわたしと山田さん以外入れないからいいの……」

綾「……」

明那「も、もういいでしょ……」

綾「動搖して力が發揮できなかつたのかしら？」

岬「では、ご入浴にしましようか」

○田中宅・寛子の部屋（夜）

寛子「こんなメガネかけてたら芋臭い。ちよ

つと不便だけど外そう」

寛子、メガネをケースにしまう。ケースをかばんのポケットに入れる。

綺麗な顔があらわになる。

寛子「沢良宜さん……」

寛子、顔を赤らめながら胸に手を添える。

○学校・3の3教室（朝）

3の3担任（30）「きょうは新しく入つてくる生徒さんを紹介します」

女教師、教壇に立っている。

生徒たち、新入生の話題について話している。

明那「どんな子が来るのかしら。転校生って言い方をしてないのは、どういうことかしら」

綾「わたくしが沢良宜さんのライバルなのは変わりませんから！ 覚えてくださいまし！」

明那、顔を赤らめる。綾から視線を逸らして胸に手を添える。

明那 M 「あんな醜態を晒しちやつて、こんなんじや青春百合恋できないわ！」

※ ※ ※

(フ ラ ツ シ ュ)

綾と同じ湯船に入っている明那。

※ ※ ※

明那 M 「っ！」

明那、顔を横に振る。

3 の 3 担任「それじや、入つてきて」

扉が、ゆっくりと開く。

青いメッシュをした小柄で瘦せている

女の子が、自信なさげに教壇に立つ。

明那 「え、なんでここに」

綾 「知り合いですの？」

大道永遠 (17) 「え、えつと。大道永遠 (だいどう とわ) です！ 今まで学校に行けてなかつたけど、なんとか追いつけたからきまつ！」

永遠、舌を噛む。あたふたしながら、黒板に自分の名前を書ききる。

女子生徒A「え。ドジつ子？」

クラスメイトたち、永遠の話題でざわざわする。

3の3担任「それじやあ、沢良宜さんの隣が空いてるからそこに座つて」

永遠、ゆつくりと明那の隣の席まで歩いてくる。

ゆつくりと、席に座る。

永遠「あ、明那ちゃん！ 会いに来たよ！」

明那「無事だったの？」

永遠「うん。保護してもらえたから」

明那「あ、そつか。その髪、エターナルかな

？」

明那N「この学校は、自由な校風で学力がそれなりに高い」

永遠「うん！ エターナルならかっこいいで

しょ！」

明那「そうだね、かっこいいし、かわいいよ」

永遠 「えへへ」

永遠、笑う。

綾 「お、幼馴染ですか？」

永遠 「うん、そうだよ！ 新しい名前も、これがいいって言ったの！」

綾 M 「なんてこと！ またライバルが増えてしまつたってことですの？」

○ 同

チャイムが鳴る。

永遠、明那にクラスラインの追加を手伝つてもらう。

永遠 「昼休みだね！」

永遠、にこにこ笑う。

4人、弁当箱を開ける。

永遠 「これ、作ったの。食べて……」

永遠、もじもじしながらタコさんワインナーを差し出す。

明那 「ん、ありがと」

明那、タコさんワインナーをほおばる。

永遠 「嬉しい！ 明那ちゃんが食べててくれた！」

永遠 、嬉しそうに笑う。

綾 「なな、何やつてますの沢良宜さん！」

明那 「幼馴染だから普通よ」

永遠 「……」

永遠の表情がすんっと真顔になる。

寛子 「大道さん、沢良宜さんとどういう関係？」

寛子、微妙な表情を永遠に向ける。

明那 「永遠ちゃんは色々あつたから、優しくしてくれると嬉しい」

永遠 「明那ちゃん」

永遠、明那の手を取る。

明那 「永遠ちゃん？」

永遠 「寂しいよ……明那ちゃん……」

綾 「なにしてますの！」

永遠 「ひつ！ ご、ごめんなさい……」

綾 「あ、ごめんなさいわたくしも言い過ぎましたわ！」

綾、焦る。

永遠「明那ちゃん……こんどの日曜日、遊ぼう？」

明那「うん、そうしよつか」
永遠「う、嬉しい！ いっぱいかわいい服とか着てくるからね！」

寛子「わたしも行く」

明那「うん、いいわ。ところで、田中さんって賢いけど、どうやつて勉強しているの？ よければ教えてもらえないかしら」

綾「沢良宜さん！ そんな簡単に教えを求めていいんですの？」

明那「わたしはひたすら高みを目指すだけ。そのためならなんだってやるんだから。お父様からは主席維持を求められているけど、別にちょっと落ちたくらいでそこまで怒られないわ」

綾「わ、わたしも負けませんわ！」

永遠「わ、わたしにも教えて！」

寛子「しようがないなあ。わかったよ」

寛子、ため息交じりに返事をする。

寛子、しばらく3人に勉強方法を教える。

永遠「明那ちゃん！ もつと賢くなつたらそ
ばにいてもいい？」

明那「別に賢くなくても、傍にいていいわ」

綾「たとえそうでも、わたくしはやる気は捨
てませんわ！」

永遠「わ、わたしだつて」

永遠、明那の腕を掴む。

明那「わっ。どうしたの」

永遠「明那ちゃんといちばん長くいたのはわ
たしだもん！」

明那「そうだね」

永遠「いちばん仲いいんだもん！」

明那M「永遠ちゃん、わたしに会えなくて今
までずっとさびしかつたんだ。一緒にいて

あげなきや」

綾「わたくしだつて、沢良宜さんから同居：
：じやなくて居候の許可いただきましたわ」

○ 同・校門

永遠 「明那ちゃん！ 日曜日、遊ぼうね！」

永遠、明那に向かつて手を振る。

綾 「むう」

綾、むすつとする。

○ 沢良宜宅・明那の部屋（夕方）

岬、ベッドに座つて明那の肩を揉んでいる。

明那「日曜日、遊びに行くことになつたから。

幼馴染の永遠ちゃんが転入してきて」

岬「そうですか。いつてらっしゃいませ」

岬、肩揉みを少し強くする。

明那「あ、気持ちいい」

綾 「むう……」

綾、不機嫌そうにむすつとしている。

綾 「むう！」

綾から大きな声が發される。

明那「どうしたの」

綾 「わたくしの事はどうでもいいんですの？」

わたくしとお友達になりたいって言つた
のは嘘だつたんですの？ わ、わたくしは

綾、明那をじつと見つめる。

明那の視界に、綺麗な綾の顔が映る。

明那「…」

明那、目を見開く。

明那の頬がぽつと赤くなる。心臓の鼓
動がはつきり聞こえてくる。

明那、きゅつと自分の手を握る。

綾「はっ」

綾、一瞬固まる。

綾「わ、わたくしはライバルですわ！」

明那「そう…」

明那、胸を押さえてしゅんとする。

岬 M 「なんとこれはまあ。お嬢様も青宮院様
も…これはわたしが、サポートしなけれ
ばなりませんね」

岬、くすりと笑う。

岬 M 「ですが、わたらから伝えるのは御法度

です」

岬 「お嬢様。わたしも同行いたします」

明那 「ありがたいけど、どうして。家事は大丈夫なの？」

岬 「使用人は他にもいるではありませんか。それに、わたしをそばに置いてくださったのはお嬢様なのですよ」

○（回想）同

岬（30）「今日からお嬢様にお仕えすることになりました、山田岬と申します」

岬、明那にお辞儀する。

明那（12）「はい！ これよしよししてね！」

明那、ぬいぐるみを差し出す。

岬、ぬいぐるみをなでなでする。

明那、満面の笑みになり、

明那「わーい！」

ぬいぐるみを高く掲げてバンザイする。

岬 M 「なんとかわいらしい笑顔でしょう。こ

れは、わたしが生涯をかけてお守りせねば

いけませんね」

（回想終わり）

○ 同（夕方）

明那「懐かしいわ。今は恥ずかしくて、ぬい
ぐるみ抱いて寝ることはあまりなくなつた
けど」

岬「ええ。では、そろそろご入浴を」

綾「ご入浴の時間は一定？」

岬「いえ、そとは限りませんが基本夕方に
ご入浴します」

綾「そう」

○ 同・浴場脱衣所（夕方）

3人、服を脱ぐ。

明那「つ！」

明那、綾の裸を見て視線を逸らす。
心臓の鼓動が早くなる。

明那M「なんでこんなに……」

明那、胸を手で押さえる。

岬 M 「お嬢様……」

○同・大浴場（夕方）

窓からきれいな夕日がのぞく。

綾 「沢良宜さん」

綾、後ろから声をかける。

明那 「ひやうっ！」

明那、声が裏返る。

明那 「ど、どうしたのかしら？」

綾 「日曜日、どこに行くか決めてますの？」

明那 「えええ、え、えっと……」

綾 「決めてませんの？ でしたら沢良宜さんの行きたいところでいいんですけど。どうしますの？」

綾、明那をじっと見つめる。

明那 「あ、えっと……せ、青宮院さんが考えておいて！」

明那、急ぎ足で洗い場に行き、風呂椅子に座る。

綾 「あらそう。じやあ、決めさせていただき
ますわ」

○ 同・明那の部屋（夜）

明那と岬の2人きり。

明那「はあ～あ……一緒に決めたかったのに」

明那、布団に潜った状態で大きなため
息をつく。

岬 「お嬢様、青宮院様のことをどうお考えで
すか？」

明那「漫画に出て来そうなお嬢様って感じ」

岬 「いえ、お嬢様が青宮院様とどういうご関
係になりたいのかです」

明那「え、えっとそれは……」

岬 M 「このくらいの気づきを与えるのは問題
ありませんね」

岬 「私が思うに、お嬢様は初めてのことでい
ろいろお悩みになつてている様子。青宮院様
は何か買いたいものがあると行つて出かけ
てしましました」

明那「使用人に頼まず自分で行くあたり、き

つちりしてゐるわね……」

岬「どうか、今のうちにご相談を」

明那「山田さん……」

明那、岬を見つめる。

明那「青宮院さんを見ると、なんだか……」

明那、布団をきゅっと掴む。

岬「では、青宮院さんが他の女の子、いえ、男の子でもいいです。お嬢様以外と親密な関係になっていたとしたら、どう思いますか。決して口外いたしませんので、うしろめたいことでも素直な気持ちをお答えください」

明那「……」

明那、しばらく黙り込む。

岬、明那に優しく触れる。

明那「やだ……わたし以外だれもいてほしくない」

岬「でしたら、それは恋でございます」

明那「そう、なの？」

岬 「はい」

明那 「でも、永遠ちゃんとか友達だし、いてほしくないなんて言えない」

岬 「お嬢様、わたしが思うに、その2つの気持ちが共存することは矛盾ではないと思いません。わたしがサポートいたしますので、一緒に頑張りましょうね」

明那 「うん……」

岬 、明那の頭をなで、そばにそつとぬいぐるみを置く。

綾 、扉を開けて入室。

綾 「ただいまですわ」

岬 「なんのお買い物を？」

綾 「チヨコの手作りキットですわ。日曜日に遊びに行くでしよう」

岬 「家の者であれば、厨房をお使いいただけます。もちろん青宮院様もその1人です」

綾 「ありがとうございます、これはお世話になつてます。山田さんのためですわ！」

岬 M 「なるほど、だからこんな夜遅くに買い

岬 M 「なるほど、だからこんな夜遅くに買い

物に行つたのですね。少し不安でしたが、
使用者を同行させたので大丈夫でしたね」

岬、窓をじっと見つめる。

窓に、岬の姿が映る。